

Little Giant1000

Track42

ブランド最小／最軽量を実現し、
大出力を誇る革新的なモデル



SPECIFICATIONS

●出力：1000W RMS (4Ω) ●入出力：インプット、DIア
ウト、FXセンド／リターン、ライン・アウト、ライン・
イン、スピーカー・アウト×2 ●コントロール：インプ
ット、インプット・アクティヴ・スイッチ、ディープ・ス
イッチ(+15dB @ 50Hz)、シェイプ・スイッチ(+8dB@30
Hz & 10kHz-12dB@400Hz)、スライダー(ベース、ロー・
ミッド、ハイ・ミッド、トレブル)、ロー・ミッド・フリー
クエンシー(160Hz to 1.6kHz)、ハイ・ミッド・フリーク
ンシー(750Hz to 7.5kHz)、トレブル・フリークエンシー
(3.5kHz to 10kHz) ●サイズ：210(W)×66(H)×310(D)
mm ●重量：3.5kg ●価格：日本未発表により未定(来春
発売予定)

ここでは特別に、来年には日本でもお目見えする新製品を、いち早く紹介したい。ベースのギグ・バッグのポケットにも入りそうな小さな筐体から驚異的なパワーを生み出す、ラボ・シリーズの最新モデルのひとつがリトル・ジャイアント1000だ。新開発されたデジタル回路のアウトプット段により、3.5kgという軽量・コンパクトなサイズながら1,000Wという大出力を実現している。EQの操作性もユニークで、100Hzを調整するベースに加え、周波数可変のセミ・パラメトリック方式のロー／ハイ・ミッド、トレブルEQを装備、限られたサイズのコントロール・パネルのなかで最大限のサウンド・バリエーションを生み出す機能を持たせている。さらに50Hzをブーストするディープ・スイッチ、ローとハイをブーストして中域をカットするシェイプ・スイッチも搭載し、サウンド・メイキングの点で不足を感じることはないだろう。XLRアウトやFXループ、ライン・イン／アウトも完備しており、セッション・ベーシストにも強い味方になってくれそうだ。

THE BASS INSTRUMENTS 2

**Ashdown
Engineering**

front & rear view



ツマミで帯域を選んでスライダーでレベルを調整するという、ユニークなコントロールにより、限られたパネル面のスペースのなかで、多彩な音作りが可能。



リア・パネルにはスピコンに対応したスピーカー・アウトやXLRアウト、そしてエフェクトのセンド／リターンに、ライン・イン／アウト端子も装備するなど、申し分ない。

Sato's Impression

コントロール部を駆使することであらゆる音を作り出せます。



えっ！ この筐体の大きさと1,000W出せるんですか？ 実際に音を出してみると、まずは、この特徴的なコントロール部を活用して、音の作り方をちゃんと覚えることが大事だと思いました。あとは、アッシュダウンっほさはありつつ、音にハリがあるので、追い込むことでかなりいろんな音が出せると思いますよ。

おすすめセッティング

Track42



音作りのポイントは、フラットな状態から、どの音域が欲しいのか、などの自分のイメージを正確に見極めることだと思います。ここではディープ・スイッチをオンにして、深みを出しつつ、ミドルで音を調整しています。

レコーディングを終えて

優しく柔らかいサウンドという印象に加え、
モデルごとに強烈な個性がある。

基本的に、アッシュダウンのアンプは、楽器の素の部分そのまま出す、ナチュラルな音っていうイメージと、優しく柔らかい音っていう印象があります。加えて弦をハジいたときに、アタックの部分が“コンッ”って鳴る感覚が気持ちいい。あと、これは個人的な好みや、自分がやっているバンドの指向にもよると思うんですが、ギラギラした人工的な音ではなくて、あくまで自然な音である、というのが良い。ただ、4機種を試奏してみて、それぞれが個性的なサウンドで“同じブランドでも、こんなに違うんや！”って驚きました。それぞれに持ち味があるんですよ。あとは……僕にとっては、チャーム・ポイントと感じているVUメーターははずせないポイントです(笑)。

